

四月の句

ゆうばれや

さくらにすずむなみのはな  
夕晴れや桜に涼む波の華・松尾芭蕉

ちようとぶや

きつねのあなもあかるくて  
蝶とぶや狐の穴も明るくて・小林一茶

はるのうみ

ひねもすのたりのたりのたかな  
春の海ひねもすのたりのたかな・与謝蕪村

しやがんでも

たちあがりてもチュウリップ  
しやがんで立ち上りてもチュウリップ・稲畑汀子

ふうせんを

つけてもどりしたびかばん  
風船をつけて戻りし旅籠・黛まどか

「はな」といえば、さくらをさします。にほんじんは、ずっとむかしから、さくらのおはなみをたのしんでいました。はるのはなをおもいうかべながら、みんなどこえにだしてよんでみましょう。

つけたしことば4

しょうがなければ みようがある

生姜なければ茗荷がある  
「しょうがない」と言われたとき

てきもさるもの ひつかくもの

敵もさる者引っかくもの  
「敵もなかなかやる」と言うとき

いけがなければ べんでんさまこまる

池がなければ弁天様困る  
「いけない」と言われたときに言い返す

いいきみさんしよに みがなった

いい気味山椒に実がなった  
「いい気味だ」と言うとき

どうりで かぼちやが とうなすだ

道理でかぼちやがとうなすだ  
「へんだと思ったが、わかった」と言うとき

ばちがあたれば たいこでうける

撥が当たれば太鼓で受ける  
「罰があたるぞ」と言われたときの憎まれ口

ごめん そうめん ゆでたらにゆうめん

ごめん そうめん ゆでたらにゆうめん  
「ごめん」と言うとき

また「つけたしことば」ができませんでした。なにかかんがえずに、たのしくこえにだしてよんでみましょう。

奥のほそみち たびだち

まつおばしよ

やよいもすえのなのか、あけぼののそら ろうろうとして、

つきはありあけにて  
ひかりおさまるものから、ふじのみね かすかにみえて、

うえの・やなかのはなのこずえ、  
またいつかはと、こころぼそし。

ふねにのりておくる。  
むつまじきかぎりはいよりつどいて、

せんじゆといふところにてふねをあげれば、  
せんどうせんせんのおもいむねにふさがりて、

まぼろしのちまたにりべつのなみだをそそぐ。  
ゆくはるや とりなきうおのめはなみだ

これをやたてのはじめとして、  
ゆくみちなおすすまず。

ひとびとは みちなかにたちならびて、  
うしろかげのみゆるまではと、みおくるなるべし。

人々は途中に立ならびて、後かげのみゆる迄はと、見送なるべし。

松尾芭蕉さんが、今の東北へ旅だった日に、友だちや弟子たちが見送っている場面です。江戸（今の東京）の桜を、今度はいつ見られるのかと不安をのぞかせています。

春望 しゅんぼう

杜甫 とほ

くにやぶれてさんがあり

しろはるにして そうもくふかし

ときにかんじては

はなにもなみだをそそぎ

わかれをうらんで

ほうかさんげつにつらなり

かшыばんきんにあたる

はくとうかけばさらにみじかく

すべてしんにたえざらんとほつす

漢詩（かんし）をよんでみましょう。古い中国のポエムです。長安の都は荒れはててしまったが、山も川も昔のままにあり、町なかには春がやって来て、草や木が深々と茂っている。

戦乱の時節を嘆いては、花を見てさへ涙がこぼれ、家族との別れをうらんで、鳥の声にも心が痛む。戦いのろしは、三ヶ月も続き、家族からのたよりは、万鈞に値するほどにうれしい。白髪頭は、かけばかくほどうすくなり、もう、すっかりかんざしもとまらなくなってしまうそうだ。

